

## JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告

JICA（国際協力機構）の草の根技術協力事業（草の根協力支援型）のスキームを使った3年間の事業が5月1日より開始され、その第一弾として5/24～5/30までマニラに行ってまいりました。今回の渡航の主な目的は、このプロジェクトに必要な情報を収集し、関係者とのネットワークを築き、フィリピンのコアメンバーを選出し、ミーティング会場候補地を選定することでした。

本事業開始にあたって、プロジェクトマネージャーである近藤恒夫は、以下のように思いを語っています。

「この事業は、当事者をエンパワーメントすることで、助けられた人自身がその経験を次に伝えるという『命のリレー One addict helping another』だ。そして、人のため誰かのためでなく、自分の回復のためにやっていくのだというモチベーションが大切。そして『恨みとコーヒーカップ』があれば仲間は増えていく。ミーティングの仲間で反りが合わなければ分裂していけばいい。そうやって分裂してグループが増えていくことで、助かる人も増えていく。こうした取り組みが、貧困層の中でどんどん広がっていくことを願っている」

プロジェクトメンバーである三浦陽二（沖縄ダルク）は、「日本の薬物依存症者がアメリカの依存症者から助けていただいたように、今度は私たちがその恩返しをする番だ。私たちは人を助けることで自分が救われるのだ」と。同メンバーの山本大（日本ダルク アウェイクニングハウス）は「言葉の障害を越えてメッセージを伝えていくことも我々の使命の一つだ」とこのプロジェクトにかかる思いを語っていました。



キックオフ・ミーティング&セレモニーの様子  
前列左から保健省エスカッティン氏、  
近藤理事長、リッチー氏、JICA山本氏  
後列左から三浦、エバングリスタ氏  
DDBガラバンテ氏、尾田、保健省レイエス氏

### < 第1回渡航スケジュール >

- 5/25(月): JICAフィリピン訪問、キックオフ・ミーティング&セレモニー
- 5/26(火): ミーティング会場候補地視察(ケソン市タロン・ラーニング・センター)  
ミーティング会場候補地視察(マリキナ市保健所)  
ファミリー・ウェルネス・センターと今後の打合せ
- 5/27(水): 日本大使館訪問、コアメンバーの面接(ファミリー・ウェルネス・センター)
- 5/28(木): ケソン市地域裁判所見学、ダマスカス・ファウンデーション見学
- 5/29(金): JICAフィリピン訪問、お別れパーティー

### 【事業概要】

**事業名:** マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業

**事業の背景と必要性:** フィリピンには約200万人の薬物乱用者がいると言われる。その多くは覚せい剤乱用者である。覚せい剤はフィリピンでは“shabu”と呼ばれているが、日本の覚せい剤の隠語である「シャブ」に由来するものである。覚せい剤は、1gあたり約1500ペソであり、100ペソ程度の小さな包装単位でも入手が可能のため、貧困層においても使用が拡大する原因の一つとなっている。日本人が発明した覚せい剤の問題に苦しむ薬物依存症者の回復支援をすることは、薬物乱用の歴史的背景からも妥当性の高いことである。マニラでは回復プログラムにつながる薬物依存症者は富裕層のみであり、貧困層にまでいき渡っていない。日本での回復プログラムの核であるミーティングをマニラの貧困層で開くことにより、誰にでも回復のチャンスがあるということを広く認知してもらう。アパリミーティングが地域で開催されることで貧困層の中でも薬物依存からの回復が可能となる。

**事業の目的:** マニラの貧困層に薬物依存症者のためのアパリミーティングが開催される環境が整う

**対象地域:** フィリピン マニラ市の貧困層地域

**受益者:** 依存症者本人とその家族、その他のワークショップ参加者(リハビリ施設職員、精神病院職員等)

**活動及び成果:**

- 1、本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。
- 2、コアメンバーの本邦研修により、アパリミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。
- 3、現地で模擬ミーティング(アパリミーティング)を開催し、地域で薬物依存症についての理解とアパリミーティングに対する理解を深める。
- 4、ミーティングの際に使用するアパリミーティング・ハンドブックを作成する。

**実施期間:** 2009年5月～2012年3月(3年)



2009・5・26付 まにら新聞

## 1 フィリピン貧困層の薬物依存者回復支援事業を始めることになった経緯

すべては約5年前、国連アジア極東犯罪防止研修所の教官をしていたある保護観察官から、フィリピンのミンダナオ島にある薬物依存症リハビリ施設が日本に支援を要請しているのを協力してもらえないかとの打診を受けたことにはじまります。世界に薬物依存症回復支援の輪を広げようとしていたアパリ理事長 近藤恒夫は、さっそくミンダナオ島にダルク・スタッフを連れて出向き、その際、マニラにも足を運び、ファミリー・ウェルネス・センター（以下、FWCと表記します）代表のリッチー・クリストバル氏とも親交を深めてきました。その後、ミンダナオ島の政情不安のためJICAからストップがかかり、急遽実施場所をマニラに変更して事業を展開することになりました。

実は近藤とリッチー氏との関係は約20年前にさかのぼります。ロサンゼルス郊外のバンナイスで開かれたNAワールド・カンファレンスで、ほとんどアジア人が参加していなかった当時、近藤はフィリピンから参加していたリッチー氏と出会っていました。リッチー氏は「ブルート」こと近藤に非常に親しい感情を覚えてくれていたようです。

その後、ヘーゼルデンなどで研修を受け、薬物依存症のリハビリの専門知識を得たリッチー氏は10年前から、マニラ市内の高級住宅地で富裕層を対象とした入寮型の薬物依存症リハビリ施設を始めます。現在ではフィリピンの民間薬物依存症リハビリ施設協会の会長という要職にあり、また、薬物依存にかかわるフィリピン保健省の役人、危険薬物委員会（DDB）の次官をはじめとする高官らとも親しく交流し、篤い信頼を得ている依存症回復支援の重鎮となっています。FWCはフィリピン政府からも注目され、DDBを退官した研究者が職員として採用されるといったような良好な関係も築き上げています。

アパリでは、正式なJICAとの契約に先立ち、JICAのアドバイザー派遣制度を利用させていただきました。昨年11月19日～25日にFWCとアパリとの間で業務提携契約を結ぶために法律英語の専門家として森村たまき氏（国土館大学法学部講師・翻訳家）をアドバイザーとしてマニラに派遣する機会をいただいた際、アパリストaffも同行しました。

このときの森村氏の最大の功績は、たぐいまれなる交渉力と社交性を発揮して、ケソン市のタタロンで貧困層を対象としたの薬物依存者回復支援を行っているNGO、アディクタス・フィリピン代表のレオナルド・エスタシオ氏（フィリピン大学准教授文化人類学専攻）をリッチー氏に紹介できたことでしょう。エスタシオ氏については、渡航直前に、嶋根卓也氏（国立精神・神経センター）から紹介され、現地到着後、アパリのプロジェクトの説明をした上で協力者になってもらうことになりました。リッチー氏とエスタシオ氏の交流は、本プロジェクトの射程を超えて、フィリピンの富裕層と貧困層支援者が結びつくという大きな意義がありました。貧困層支援の情熱はあっても具体的な支援方法を知らなかったFWCと実際に貧困層支援をしているが効果的なプログラムを取り入れていなかったアディクタス・フィリピンとが手を結ぶお手伝いのでしたのです。



2009・5・28付 Malaya Living



左がケソン市地域裁判所サラザール判事、右が近藤理事長



ダマスカス・ファウンデーションにてマニラから車で2時間北に行ったバルカン市にあるキリスト教系のリハビリ施設。カナダ、エストニア等世界各国から心理学科の学生が集まっています。



ダマスカス・ファウンデーションの施設の壁にペインティングされている平安の祈り

また、治療を重視した「私設ドラッグ・コート」と呼べるような裁判実務を続けておいでケソン市地域裁判所サラザール判事と巡り会うことができ、エスタシオ氏と共に本プロジェクトに關与していただけたことも大きな収穫でした。

## 2 キックオフ・ミーティング&セレモニー 5月25日(月)

この式典は、関係者に対しこのプロジェクトの概要を説明すること、貧困層の依存症者支援に対する理解を深めてもらうこと、そして協力をいただけるよう親睦を深めることを目的としていました。参加者は保健省、危険麻薬物員会(DDB)、教会関係者、リハビリ施設職員の方々、そしてFWC職員、リッチー氏とご家族、総勢50名ほどでした。

長い年月のあいだ、リッチー氏を始めアドバイザーの森村氏など多くの方々に関わり、ご協力いただいたお陰で、キックオフ・ミーティング&セレモニーは大変意義深いものとして終えることができました。この場を借りまして感謝申し上げます。

### <式次第>

- ディンゴ・クリストバル牧師(リッチー氏の兄)による祈り
- 出席者紹介(リッチー氏)
- アパリの活動と本プロジェクトの概要についてのプレゼン(尾田事務局長)
- 日本ダルク アウェイキングハウスの紹介(山本施設長)
- FWCの紹介(リッチー氏)
- アディクタス・フィリピン代表エスタシオ氏の挨拶
- レニー・クリストバル氏(リッチー氏の父親でFWS理事)の挨拶
- JICAフィリピン事務所の山本氏の挨拶
- エル・ラザーロ司教の挨拶
- 危険薬物委員会(DDB)ガラバンテ氏の講演
- 保健省エスカッティン氏の挨拶
- FWC理事長エバンゲリスタ氏の挨拶
- 近藤恒夫の挨拶

この模様は、地元の新聞社2社から取材を受け掲載されました。また、JICAホームページでも紹介されました。

[http://www.jica.go.jp/topics/2009/20090612\\_02.html](http://www.jica.go.jp/topics/2009/20090612_02.html)

## 3 アパリ・ミーティングの候補地の選定 5月26日(火)

### タタロン・ラーニング・センター視察

ケソン市にはタタロンという貧困地域がありますが、エスタシオ氏の運営するアディクタス・フィリピンの指導の下に子どもたちに薬物の一次予防教育を実施しているタタロン・ラーニング・センターのイブリン・ガーラン女史をアパリ代表団、リッチー氏と共に訪ね、現地の視察をするとともに、ミーティング会場として利用できないか交渉してきました。その結果、快く協力したいとの返事をいただきました。

### マリキナ市保健所視察

マリキナ市はマニラの郊外にある都市です。以前よりFWCはマリキナ市の保健所で薬物乱用防止教育のためのパネル展示等の啓蒙活動で協力関係を持っていました。そこへアパリ代表団、リッチー氏と共に訪ね、本プロジェクトにおいて保健所をミーティング会場として無償で貸与していただけないかと打診したところ、ご快諾いただきました。

## 4 コアメンバーの選出 5月27日(水)

午後2時から、FWCにおいて、日本で2週間の研修を受け、マニラの貧困地域においてアパリ・ミーティングを開くファシリテーターとなるための候補者男性6名、女性1名の合計7名を面接しました。自助グループ参加歴の長いダルクのスタッフたちは様々な観点から鋭い質問を重ね、今回ひとまずコアメンバー4名を選出することができました。

## 5、今後の予定

2009年9月4日から2週間、フィリピンのコアメンバー3名が本邦研修に参加するため日本に来ることになっています。研修の目的は、上野にある日本ダルク、藤岡のアウェイキングハウスに滞在しながら、自助グループに通うなど日本の回復施設と自助グループの活動を体験を通して理解を深めてもらうことです。その他にも多様なワークショップを企画しています。



キックオフミーティングでのプレゼンの様子(尾田)



タタロン・ラーニング・センターのスタッフとともに



タタロンの子供たちと近藤理事長



左から二番目が保健所の所長



コアメンバーの面接風景